

# 3・11から未来へ

## 石巻の記憶 雑誌で残す

### 横浜の作家・大島さん 昨年創刊

横浜市金沢区に住む作家の大島幹雄さん(62)が昨年末、故郷の宮城県石巻市をテーマにした雑誌「石巻学」を創刊した。人々の営みが押し流され、更地になった津波被災地。失われゆく過去を掘り下げて記録し文化を見つめることが、未来につながることを考えた。



①「石巻学」に掲載の震災前の写真。獅子の巡行について歩く子どもたち  
②練り歩く獅子をほろ酔いの男たちが挑発する  
③いずれも石巻市金谷地区、奥野安彦さん撮影



## 切り捨てられる文化・歴史…忘れまい



大島幹雄さん



雑誌「石巻学」

街を練り歩き民家に入り込む獅子舞。子どもは獅子に群がり、男たちは酒に酔って獅子を挑発する。巻頭に石巻市金谷地区の祭りの写真が載っている。地区は津波で壊滅し、住民の4割が犠牲になった。写真は震災前の貴重な記録。助かった人たちはバラバラに転居し、祭りは復活できるかわからない。

復活した鉄道の旅行記や文化人のインタビュー、魚市場の物語、明治時代のラッコ猟やフカヒレ製造の記録。石巻にまつわる多彩な記事が並ぶ。「ノスタルジィではなく、過去を振り返ることが未来につながる」と言う。

大島さんは石巻生まれ。ロシア文学を学んだ縁で、ソ連や東欧のサーカスを扱う会社に入社。横浜に居を構え、サーカスのプロデューサーや作家として活動してきた。

石巻に再び目を向けたのは約20年前。古書店で手にした本で、江戸後期に石巻

を出港して遭難し、ロシアに漂着した人々がいたことを知った。ロシアと石巻。自分と共通するキーワードに興味をひかれた。

米を運ぶ千石船で「若宮丸」といった。極北の孤島に漂着した16人の船乗りは、日本との交易を熱望するロシア政府の意向を受けて皇帝とも謁見。途中で死んだ者、ロシアへの帰化を選んだ者もいたが、11年後、4人が世界を西回りに一周して帰国を果たす。

記録に残る中では初めての日本人の世界一周だが、謎も多い。研究にのめり込んで石巻に通い、地元の人たちと「石巻若宮丸漂流民の会」を作った。ロシアにも調査に出かけ、漂流民から学びロシア側が作った「露日辞典」も発見した。

震災2カ月後のことだ。横浜市中区の日本新聞博物館で、石巻日日新聞が発行した壁新聞の展示を見た。

### 「我に希望あり」

輪転機が水没し、紙にペンを書き込んだ手書きの新聞。必死に希望を伝えようとしているように見えた。新聞社に「小説を書かせてください」と申し出た。

題材は無論、若宮丸だ。船乗りたちは、江戸幕府との交渉に向かうロシア船に乗って、帰国を果たす。その船は「ナシエーシダ号」といった。ロシア語で「希望」の意味だ。

嵐で遭難し見知らぬ土地に流れ着いた船乗りは、力を合わせて幾多の困難を乗り越え、希望という名の船でついに帰国を果たす。その姿が石巻に重なった。「我にナシエーシダあり」。そう題した連載を始めたのは2012年4月。

「豆知識」編も挟んで毎日連載し、翌年8月まで本編だけで310回に及んだ。史実に沿って書いたが、フィクションも含めた。実際は16人の間に様々な葛藤があった。仲たがいの場面もあつた。だが連載は、助け合って難局に立ち向か

うさまを描いた。

「岐路に立った時は仲たがいをしちやいけない。みんな助け合おう」。復興へのメッセージを込めた。若宮丸を調べる中で見えてきたことがある。石巻は外から集まってきた人が居着いてできた街。千石船の船乗りたちもそうだった。

「古くからコスモポリタンな一面がある」。震災ボランティアに来て、石巻に定住する人も多いといい、そんな街の性格が影響している。と見る。

### 「まず10号」目標

津波ですべてが押し流された大地で今、大規模な土木工事が進められている。そこにかつてあつた人々の営みは跡形もない。「復興が進み、文化や歴史が切り捨てられていく。住んでいた街を忘れてしまつてはいけない」

そんな思いで、記録のために雑誌を作ろうと呼びかけた。刊行は不定期で、まずは10号まで作ることが目標だ。定価1500円(税別)。有隣堂伊勢佐木町本店(電話045・2661・1231)などで、発売元は仙台市の荒蝦夷(電話022・298・8455)。(太田泉生)